

第三節〈実践編〉
1 中世の文書と記録
宝珠院文書を読む
― 雑掌澄承は
どこで殺害されたのか ―

実際の歴史研究では、複数の史料を読み解き、それらを組み合わせることで、歴史上の事実を確定し、その事実が持つ意味について考えるという手順が踏まれます。そのひとつの事例として、ここでは近年公表された東大寺の宝珠院文書を使い、中世尼崎に生きた人々の実像に迫りたいと思います。

悪党・教性と雑掌澄承
中世尼崎を彩る人物はたくさんいますが、そのなかでも鎌倉時代末期の尼崎に登場した異彩を放つ二人の人物がいます。一人は江三入道教性と名乗る人物です。彼は、嘉暦元年（一二三六）に鴨社領の長洲御厨の荘官らとともに、尼崎大覚寺の守護を誓うことを神仏に誓約した起請文（『尼崎市史』第四巻大覚寺文書六）に「番頭」として名を連ねており、尼崎に居住する有力な住民であったと推測されます。しかし、鴨社と対立する東大寺から見れば、教性は東大寺領長洲莊を侵害する「悪党」でした。正和四年（一二三五）には九〇余名の悪党とともに摂津国兵庫関において守護使と合戦するなど（市史第四巻一般編年史料一五三）、教性は少なくとも大阪湾の西湾岸を活動領域としていました。東大寺は教性を悪党集団の張本人として、何度も公家法廷に訴えています。

もう一人の人物は、東大寺領長洲莊の雑掌澄承です。雑掌とは莊園経営の実務を担う役職です。澄承は東大寺領の兵庫関の雑掌も務めており、大阪湾岸における東大寺領経営の重要な担い手であったと推測されます。澄承は長洲莊の拡大を暴力的に進めたようで、しばしば周辺の領主からその濫妨を訴えられています。

東大寺の支配を妨げる悪党教性と、東大寺領の拡大を目指す雑掌澄承は、当然のことながら対立関係にありました。嘉暦四年に東大寺は教性を澄承殺害の罪で訴えており、両者の対決は、教性によって澄承が殺害されるという結末を迎えました（市史第四巻猪名庄・長洲庄関係史料九二）。

宝珠院文書の公開
ここまでのことは、おおよそ旧『尼崎市史』の段階で知られていたことでした。しかし、長洲莊の領主であった東大寺法華堂の文書を伝えた宝珠院文書（京都大学総合博物館所蔵）が公開されるに至って、これまで知られてこなかった尼崎の悪党事件をめぐる事実が次々と明らかにされました。その一端については、『図説尼崎の歴史』中世編第二節4「悪党の蜂起」でも触れたところです。

さらに、宝珠院文書には訴訟関係史料、莊園経営史料、私信などの古文書だけではなく、鴨社との裁判のため、京都の公家法廷（後醍醐天皇の法廷）に出廷した東大寺の覚英という僧侶の訴訟日記（『覚英訴訟上洛日記』）が含まれており、これらを組み合わせて読むことで、新たな研究の可能性も出てきました。

ここでは新しい史料を読み解きながら、いったい教性は澄承をどこで殺害したのか、という問題について考えてみたいと思います。というのも、先に紹介した

延慶三年（一二一〇）以来「犯科」を重ね、嘉暦三年一二月には京都三条高倉において放火殺害を行なったことを非難しています。教性の活動は大阪湾岸にとどまらず、京都にまで及んでいたのです。

また、鴨社の神官祐尚が、長洲莊において「放火狼藉」を行なったことも東大寺の訴状（同前）に見えます。教性は東大寺の訴えを受けて身柄を拘束しようとする幕府の使者に追われていましたが、鴨社の保護によってその追及をかわしていました。先に述べたように、教性が鴨社の荘官とともに、尼崎大覚寺を守護する起請文に署名したことを念頭に置くと、教性は鴨社神官と結びつきながら、尼崎、京都の双方で活動したといえそうです。

以上、教性、澄承の両者はともに、自己の權益を拡大するために、首都京都と尼崎を行き来しつつ活動していたことが明らかになってきました。宝珠院文書は、尼崎の悪党事件が尼崎だけでは完結しないことを新たに教えてくれるのです。

澄承の拠点はどこか？
ではふたたび、「日記」に戻りましょう。覚英は出廷するために東大寺から京都に上ったとき、いつも四条高倉に宿所をとっていました（たとえば嘉暦二年五月二五日条）。そして、訴訟団のリーダーである頼心の宿所で、他の二つのグループのメンバーと合流し、澄承が準備した景気つけの酒飯を平らげて、出廷するのを常に行っていたようです（嘉暦二年六月二一日条）。また、退廷後も頼心の宿所に一旦もどり、そこで澄承のねぎらいを受けました（同二七日程）。これらの記事からすれば、澄承は京都を拠点としていた可能性が浮上してきます。

こうした推定を念頭に置くと、従来から知られてい

京都大学総合博物館所蔵

宝珠院文書「覚英訴訟上洛日記」（抄）

『地域史研究』第一一五号掲載、天野忠幸・樋口健太郎「尼崎市史古代・中世史料補遺（二）」より引用

嘉暦元年三月一六日程

開発田事　嘉暦元

三月十六日ニ社家ト被召合之処、任建保　宣旨、被付社家了、寺遍ノ使者ハ藏人上座寛禪・若狭五師円英・少輔公祐賢、澄承僧都方ヨリ、丹後阿闍梨・大式法眼・大夫殿・サツマ房、堂家ヨリハ専栄房大・堯春房大・覚舜房大・覚英付衣ニ袴、

嘉暦二年五月二五日条

嘉（市史）二一五月廿五日、長洲開発田事ニ、堯春房大ト（市史）
□英（市史）同道シテ上洛ス、粮物一貫惣堂ヨリ給之、（市史）
（市史）木津ヨリ船ニ乗ル、下人ハ石熊丸、又堂童子普賢丸、宿所ハ四条坊門高倉、廿六日議定ニ会ム料也、
頼心助得業也、廿五日ニ上洛アリ、其モ木津ヨリ船、
（後略）

嘉暦二年六月二日程

廿一日、出仕人々、助得業・若狭五師・（市史）
（市史）仙聖房　肥前公・常陸公上洛、以上鈍色、
（市史）覺英付衣五帖、○御治世常盤井殿へ行幸
之間、於彼御所、被行御沙汰、但社家乍進奉、
臨当日、雑掌所勞之由令申之、不出也、然間
寺家使者対頭左大弁殿申云、社家加様ニ寄
事於左右難渋之上者、大物・尼崎事、可
預　勅裁之由、言上之処、則以此趣、彼弁殿

被経　奏聞之処、勅答云、此事、寺家所申、
雖有其謂、寺社相論為重事之上、議定衆
無人数之上ハ、来廿七日必可有御沙汰之由、被
仰出候之間、無力退出了、但当座
被成廻文、則被載誠詞、仍寺家ハ当座
加奉了、案文当座書之、而令召
返付之処、僧都之許ヨリ酒・サウメム
持寄之、出仕人々呼寄勸之、毎度
助得業宿所ヨリ出立ス、又装束モ一向
僧都秘計也、

嘉暦二年六月二七日程

（前略）宿所ニテサツマ房・

覚英兩人シテ書之処、僧都申云、此目安ヲ
社家へ被下者、縦横子細ヲ載テ、沙汰延引
スヘキ上ハ、使者ノ外ノ在京衆徒不可然之由、
令申之上者、書進之条難治之由可被申之由、
令申之間、若狭五師・仙聖房二人押返内裏へ
参シテ頭弁ヲ以テ経奏聞之処、三日御
沙汰ニ於テハ不可延引之上者、可書進之由、重
被仰出之間、無力一本書之、以順真房
勾当、記録所へ参シテ開闔ニ交替了、仍
社家へ被下之、但裏ニ開闔判ヲ加了、
又返立ニムキ酒在之、僧都構之、又

嘉暦二年一〇月八日程

此人々三条へ講シテ饗応ス、
八日、出対ノ使者、円英五師・少輔公以上、覚英ハ
付衣ニ五帖、記録所ニ出仕人々、開闔、明清（市史）
侍從中納言・万里小路大納言・伝奏・長孝、
社家両三人出対ス、此日ハ議定衆無人数トテ
延引了、其時寺家云、理非ノ段ハ先々事了了、
サノミ延引之条、数日在京難堪之由令申之処、
明日可参之由、社家ヲモ召仰ス、仍退出了、

た史料の読み方も深まってきます。正和四年、澄承は東大寺に対して、たとえ公請僧（朝廷の法会に参加を求められた僧）の要求であつても、東大寺の関係者が署名した文書がなければ、年貢を引き渡さない、という誓約書を書いています（市史第四巻猪名庄・長洲庄関係史料八五）。つまり、澄承は東大寺領の年貢を手許にプールし、東大寺の要求があるごとに引き渡しており、時として京都にやってきた公請僧は勝手に澄承からプールされている年貢を引き出していたことがわかるのです。この文書からも、澄承の拠点が京都にあったことが裏付けられます。

では、澄承の拠点はどこにあったのでしょうか。それを探る鍵も「日記」のなかにあります。覚英の記述によれば、覚英は訴訟団の集合場所や宴会の場所を、時に「三条」と記しています（嘉暦二年一〇月八、九日条。さらに、覚英は澄承僧都のことを一か所だけ、「三条僧都」と記しています（嘉暦三年四月二日条。これらのことから、澄承の拠点は京都の三条にあったことがわかってきます。

澄承殺害の顛末 ここまで来れば、教性が澄承をどこで殺害したのか、ほぼ確定したといつてもよいでしょう。**教性の活動**で述べたとおり、東大寺は教性が嘉暦三年一二月、京都三条高倉で放火殺害に及んだことを厳しく非難しています。東大寺が教性の放火殺人事件を訴えたのは、東大寺がこの事件で、長洲荘経営に関係のある施設を焼かれ、人物を殺害されたからであるはずです。

そう考えると、この三条高倉放火殺害事件によって殺害されたのは、澄承であつたと判断して間違いないでしょう。尼崎における教性と澄承の対決は、教性が

京都にある澄承の拠点を直撃するという、劇的な結末で幕を閉じたのです。

以上、新たに公表された宝珠院文書を読み解くことで、従来空白であつた、教性がどこで澄承を殺害したのか、という問題を考えてきました。それでは、その現場が尼崎を離れた京都であつた、ということは何を意味しているのでしょうか。

それは、荘園制という土地支配のあり方が、現地と首都京都の双方で支えられていたことを示しています。現地の支配はもちろん重要ですが、鴨社と東大寺が公家の法廷で対決したように、尼崎における領主間の対立は京都で裁定されました。また、雑掌である澄承が京都に拠点をおいていたのも、公家法廷での裁判に対応するとともに、京都が物流や情報の結節点であつたからだと考えられます。

そして、現地と京都で起こるべきことは、緊密に関連していたはずですが、教性が澄承を殺害したのは嘉暦三年一二月です。これに先立つ八月二十七日、東大寺は長洲荘の開発田をめぐる鴨社との争いに勝訴しています（市史第四巻猪名庄・長洲庄関係史料九六）。これまでの澄承の強引で暴力的な荘園経営から考えれば、東大寺の勝訴は長洲荘における澄承の活動を活性化させるきっかけになつたと推測されます。このような逆境からの巻き返しをはかるべく、教性は尼崎から京都三条に向かつたのではないのでしょうか。

（参考文献）

『中世寺院における内部集団史料の調査・研究』平成一五年度／平成一七年度科学研究費補助金（基礎研究（B））研究成果報告書、研究代表者勝山清次、平成一八年三月。法華堂文書・宝珠院文書（京都大学総

中世の文書と記録 史料にみえる中世

―尼崎の人々と生業―

港湾都市尼崎の展開

神崎川河口の砂州上に立地する中世尼崎は、一二世紀半ばの史料にはじめてその名がみえ、湊として機能するようになったと考えられます。一四世紀初頭になると、兵庫嶋（現神戸市兵庫区）・渡辺（現大阪市中央区）と並ぶ「摂津三ヶ津」として関所が設けられ、海運によって運ばれてくる物資から関銭が徴収されるようになります。しかし瀬戸内海海運における関銭徴収は、一四世紀末までに東大寺領兵庫北関・興福寺領兵庫南関に一括されたようであり、尼崎の関所についてはよくわかりません。一方で兵庫北関については、一五世紀半ばの詳細な関税徴収記録「兵庫北関入船納帳」が伝来しています。市域の船籍地としては尼崎・杭瀬・梶島があり、尼崎船の船頭の居所として大物・市場・辰巳などの地名も確認でき、海運業に従事する人々が居住していたことがわかります。

兵庫に到着した物資は西国街道を通過して陸路で京に向かったものとともに、水路をそのまま運ばれ神崎川河口を通過するものもあり、その際には尼崎の人々も関わりを持ったと考えられます。そのなかで、むしろ兵庫よりも尼崎のほうが関係が深かつた商品が材木で、『図説尼崎の歴史』中世編第二節2「港津の発展と商工業」にも紹介しました。その後の史料調査によつて、一四世紀後半から一五世紀前半にかけて、巨額の

材木を取引する尼崎商人の実名（法名）を複数確認できることが判明しましたので、その経緯について報告します。

材木集散地尼崎

尼崎と材木との関係は、昭和四八年（一九七三）に刊行された『尼崎市史』第四巻史料編（古代・中世）に収められた史料からも知られ、鎌倉初期の東大寺大仏殿造営材木は、周防国から尼崎を経由して運ばれたとされています（市史第四巻 般編年史料七九）。

また応仁・文明の乱の兵火で大打撃を受けた京都周辺において、安貞元年（一二二七）の棟札が残る現存最古の建造物である大報恩寺千本釈迦堂）については、次のように伝えられています（同前一〇七・一〇八）。貞応二年（一二二四）に義空上人が本堂建立のための大黒柱がみつからず苦勞していたところ、尼崎の成金（浄金）という富商の夢に現れた老人が材木に大報恩寺印をつけ、目覚めると実際に印があつたためその材木を寄進したというものです。ただしずれも後世の伝承で、同時代史料とはいえないという問題点があります。

しかし、この四〇年の間に新たに活字化されたり、公開された史料も多数にのぼります。日本各地に所在する文字史料の写真撮影を進めている東京大学史料編纂所では、インターネット上で目録検索が可能になり、活字史料の一部については全文検索ができるようになりました。

私は尼崎などの中世の都市や物流について研究していますが、「兵庫北関入船納帳」のような帳簿は希有で、断片的な史料をつないで考えるしか手段はありません。もっとも、文字史料の多くを伝える寺社にとつて造営事業は一大イベントであり、ここ数年来はそう

嘉暦二年一〇月九日条

此人等ヲ出立ニ参ヘ請シテ罷出ス、
九日、如前日三人参ス、出仕人々ハ、
開闔・前大判事・章房・明清、
弁官一人、万里小路大納言・二条中納言・侍從中納言、
此日ハ又社家不参、仍御沙汰延引之由、被仰出之間、
寺家申云、難波及度々之上ハ、為一方可有御沙汰之由、
令申之処、越訴奉行参入之時、可申之旨被仰之間、
対開闔、奉行ハ誰人乎之由不審之処、
尹大納言ト云々、此日モ無力退出ス、
（花山院御覽）

嘉暦二年一〇月一日条

（前略）覚英ハ、十二日晚、為○内検、サツマ房ト同道シテ
京ヨリ下向ス、両使者ヲ十六日乃至十八日等ノ
沙汰ニ会ムタメ逗留ス、

嘉暦三年四月二日条

嘉暦三―四―廿一、大物・尼崎事、記録所へ
参スル人々、助得業房・太輔上座・輔都維那・
但此二人、自余寺訴ニ兼日在京之間、同参ス、
皆鈍色、此装束ハ三条僧都秘計、又覚英
上洛シテ同ク参ス、専永房大・サツマ房等在之、
東大寺使者参スル由、開闔ニ申置テ、釣殿ノ
辺ニ集居テ、可随召之由相存之処、自余
一ヶ条被召合之後、還御之間、無力退出ス、
（後略）

合博物館所蔵）の研究及び平安・鎌倉時代分の翻刻、
目録を掲載している。のちに研究部分を中心に再編集し、
勝山清次編『南都寺院文書の世界』（思文閣出版、平成一九年）として刊行。

（執筆者）市沢 哲



京都市上京区 大報恩寺（千本釈迦堂）
尼崎の富裕な材木商人が、大黒柱の材木を寄進したと伝えられる。

宮の再建に、社家大工・公家政権に組織された大工・足利將軍家の大工とともに、南都番匠・尼崎番匠が動員されていることが確認できます（同前一九四）。番匠とは当時の建築工人を指す用語で、現在用いられている大工は番匠組織の頂点を意味します。ここにみえるのは当時最高の技術を有した番匠たちだと考えられますが、大寺社の存在しない尼崎番匠が含まれているのは、山で切り出された材木が尼崎まで輸送され、そこで部材の加工が行なわれていたためと思われます。材木集散地である尼崎では商人が活動するとともに、加工业も発達していたと考えられ、先述の杉櫃も尼崎で製作されていたのかもしれませんが。

材木問丸善重　その後も摂津勝尾寺（同前二〇〇）、京都祇園社（同前二六三）などが、尼崎から材木をわざわざ調達していることが知られますが、商人の実像まではわからず、京都鴨社の場合は尼崎に立地する長洲御厨ながすのごくりやの関係者が仲介しているかのように、文言のみからはみえます（市史第四巻猪名庄・長洲庄関係史料二二二～二二三）。

それに対して南禅寺造営では、尼崎市教育委員会が把握している応安七年（一二七四）の文書に「問丸善重」の名前がみえます（鳥取県立博物館所蔵文書）。問丸とは物流に従事する倉庫業者のことですが、永和元年（一二七五）の南禅寺関係者の書状によると、関銭免除のための文書では美作国みまさかのくに（現岡山県北部）からの輸送品と記されているにもかかわらず四国材木だったため、神崎関所で問題になり、尼崎から問丸善重を参上させて説明するとあり『南禅寺文書』^{（3）}七九、尼崎を拠点にしていたことがわかります。

ただしこれだけでは善重が単なる商人ではなく、南

禅寺と特別な関係を持っていた可能性を完全には否定できません。そこで注目したのが東寺造営方という組織です。京都の東寺は三万通以上という日本最大の中世文書を現在に伝えています。修造実務に携わる造営方の関係文書には、尼崎番匠の後継にあたる「漢崎番匠」が伊丹番匠・湯山番匠とともに活動していたことが、『兵庫県史』史料編中世六に翻刻された文書から知られます。活字にはなっていないものも多数ありますが、目録が整備されており原文書の大部分を所蔵する京都府立総合資料館の「東寺百合文書Web」により、詳細な写真をインターネット上で閲覧できるようになりました。造営方では毎年収支決算書が作成されており、そのうち康暦二年（一二八〇）に、「尼崎善重材木分」として七三貫文が支出されていることが判明しました（東寺百合文書と函六二）。これによって、善重が尼崎に拠点を置き、複数の顧客を持つ材木商人であることが明確になったのです。

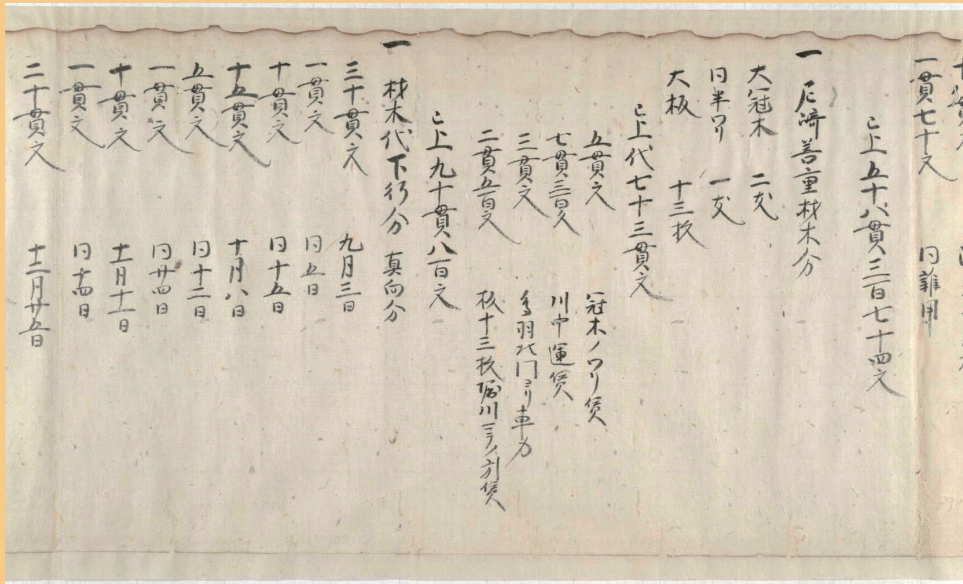
そこでもしやと思い、東京大学史料編纂所の古文書フルテキストデータベースで「善重」を検索してみると、『大徳寺文書』二六一一として、「当庵材木之料足未進分八十八貫三百卅文、善重為追善寄進当庵」という記事が目に入りました。「当庵」とは大徳寺塔頭の如意庵のことで、その造営材木の不足分を善重が死後の追善のために寄進したということです。文書に年紀は記されていませんが、関連する記事から一四世紀末から一五世紀前半のものであることがわかります。そこから尼崎の善重であることは確実で、用立てた材木代銭のうち、支払われなかった部分を寄進という形で精算したものと思われます。

さらに後述する事情から昭和五年に開山円爾えんにの

たまたま目にする機会があり、そのなかに「海崎宗義」の名を記したものを発見しました。応永二年（二四一八）八月二一日付で東福寺側の造営担当者五名が連署して、材木代銭二、二八三貫八〇〇文を得地年貢で返済するという、宗義にあてられた借用書です。^{（6）}文書には別筆で応永二四年分として二七五貫文、同二五年分として四〇〇貫文、同二六年分として五〇〇貫文、同二七年分として五〇〇貫文、同二八年分として三五〇貫文、同二九年分として二五八貫八〇〇文が返済され、そのうち二八貫八〇〇文は宗義が寄進したとあり、六年分の年貢で精算され借用書が回収されたことがわかります。

ここから宗義は、巨額の材木を事前に調達できるだけの経営規模を有していた大商人であったことが明らかにになりました。銭の換算はなかなか難しいのですが、一貫文は現在の七〜一〇万円ほどとされ、その規模が想像できます。応永三五年に完成した法堂は、応仁・文明の乱を乗り越えたにもかかわらず明治期に焼失してしまい、残念ながら、いまは見ることができません。しかし、室町期京都の寺社造営の材木の多くを尼崎商人が調達したことは確実で、大報恩寺も室町期に大規模な修補がされています。材木を寄進したという成金の逸話も、むしろこの時期の尼崎商人の活動が反映されているのかもしれません。

今後の課題　もっとも、一六世紀に向けて尼崎商人の地位は相対的に低下していくようで、林業地帯である紀伊・四国・南九州産の材木は堺商人が扱うようになります。そのためか、いまのところ確認できている尼崎の材木商人の名前は以上ですべてとなりますが、いままでの叙述でおわかりいただけるように、まだま



京都府立総合資料館所蔵・東寺百合文書と函六一「造営方散用状」より、康暦二年に尼崎の材木商人「善重」に対して東寺の造営方が材木代七三貫文を支出したことが記されている部分。善重の名は、この文書を含む、伝来の異なる五種類の中世文書に登場することが確認されている。（画像は京都府立総合資料館「東寺百合文書Web」より）

六五〇年遠忌を記念して刊行された『東福寺誌』を読んでいると、至徳元年（一二八四）二月二七日付けで、善重が「東福寺法堂御材用」として十貫文を受け取ったという文書が引用されていました。史料編纂所から刊行された「東福寺文書」（『大日本古文書』家わけ第二十）には収録されていませんが、かつて存在したことを疑う余地はありません。

実に善重は、判明しているだけでも四か所の寺院と取引していた材木商人だったのです。さらに近年公開された宝珠院文書中の貞治四年（一二六五）「野地前田田数目録」により、善重が尼崎に一町以上の田地の権利を有していたことがわかりました。^{（4）}まったく伝来の異なる五種類の文書にみえる民間人など、中世史研究では他に類例をみないもので、善重の商取引先は想像以上に広がったものと思われます。

材木取引で巨利を得た宗義　さて、善重が関わった東福寺法堂造営はかなり長期にわたる事業になったようで、応永二年（一四一四）には、寺領荘園である周防国上得地かみとくち上村年貢米から材木二百貫文分を「海崎道善」に、百貫文分を「海崎宗義」に支出するところが承認され、翌年五月にそれぞれの代官と思われる「あまさき大物又二郎さこ」と「八郎」が米で受け取ったことがわかります（『九条家文書』一八二六、一八二九）。善重に引き続き、尼崎には材木商人が複数活動していたことが明確になるとともに、代米を受け取る代官が別にいることから、かなりの経営規模を有していたことが判明します。

この史料は刊本で確認していたものですが、京都市内の古文書撮影を進めている京都市歴史資料館で東福寺大工に関する文書群である川瀬正太郎氏所蔵文書を

だみつかる可能性があります。『尼崎市史』が刊行された頃と比べて状況は異なっているとはいえ、史料にあたりをつけて読み解いていくためには専門的な予備知識が必要ですし、せっかく「遷宮記録」にたどりついても、当日の儀式次第しか記されていないものも少なくありません。

終わりのない作業だといえますが、人名が判明することで、尼崎と記されていない史料まで活用できるように、手がかりを得るとそこから新たな拡がりもみえてきます。そこに歴史研究の醍醐味があり、その成果をまた何らかの形でご報告できるよう願っています。

（注）

- （1）燈心文庫林家辰三郎編『兵庫北関入船納帳』（中央公論美術出版、一九八二）及び、『兵庫県史』史料編中世五（兵庫県、一九九〇）に翻刻・解説掲載
- （2）大村拓生「鎌倉後期の尼崎―長洲庄「悪党」教念・教性の活動を通じて―」（『地域史研究』第三九巻第一号、二〇〇九・九）
- （3）『南禅寺文書』上・下（南禅寺宗務本所、一九七二・一九七八）
- （4）小橋勇介「貞治四年「野地前田田数目録」に見える人名と寺院について」（『地域史研究』第一二三号、二〇二三・一一）
- （5）圖書寮叢刊『九条家文書』一〜七（宮内庁書陵部、一九七一〜七七）
- （6）大村拓生「室町期尼崎における材木商人に関する新史料」（『地域史研究』第一一五号、二〇一五・一〇）に全文を紹介。

（執筆者）大村 拓生

Column
―中世の文書と記録―
中世尼崎への旅
―紀行にみえる尼崎―

旅行中のできごとや感想をまとめて記した文章を紀行といいます。日本では、九世紀前半、中国に渡った僧円仁の『入唐求法巡礼行記』が本格的な紀行のはじまりといわれています。中世に入ると、寺社参詣など人々の移動が活発になり、多くの紀行が作成されるようになります。これまでの歴史学では、こうした紀行にはあまり目が向けられてきませんでしたが、近年、地域史の研究が進展するなかで、人々が実際に地域を歩いて見聞を記した貴重な記録として、あらためて見直されるようになっていきます。^①

中世の尼崎について考えるうえでも、こうした紀行の存在は貴重です。中世に成立した紀行には、尼崎付近を通り、その景観を記したものがあほ、実は尼崎を旅の目的地にした紀行もあるのです。これを従来歴史学で分析されてきた文書史料などと組み合わせれば、中世尼崎のイメージはよりいっそう具体化・鮮明化するのではないでしようか。

そこで、ここでは一世紀から一三世紀にかけての三つの紀行を取りあげ、そこに記された尼崎の風景についてみていきます。紀行を通して、中世尼崎への旅に出かけてみましょう。

源俊頼の旅 平安時代、貴族は京都にいる者ばかりではありませんでした。下級から中級の貴族のなかには、諸国の守や介の官職に任じられて諸国に赴任し、

国の統治や税の収納にあたった者がありました。これを受領といひます。

これまでの紀行研究では、受領の任地への旅の記録はあまり残っていないとされていひますが、一二世紀、歌人・歌学者として活躍した源俊頼の歌集『散木奇歌集』^③は、これに類するものとして注目されます。俊頼自身は受領の経験はないのですが、父の経信は太宰権帥に任じられて嘉保二年（一〇九五）に九州に赴任しており、俊頼もそれに同行して九州に赴きました。『散木奇歌集』のなかには、この赴任同行のときの歌と、永長二年（一〇九七）、父の死にもなつて京都へ帰ることになつたときの歌が収められており、とくに後者は行程順に歌が配列され、詞書も詳細に記されるなど、ほほ紀行として扱つてよいと考えられるのです。

永長二年三月五日、父経信の中陰（四九日）の法要を済ませた俊頼は、同月二〇日、太宰府を出立して京都への帰途につきました。三月二八日に博多にて船に乗つてからは海路を進み、途中、芦屋・赤間・「むべ」（宇部）・鞆・児島・室津などを経て明石に着きます。^④そして五月一日、明石を出発した俊頼は、海から「わだのみさき」「いく田のもり」「なるを」などを眺め、「一のす」を経て、二日には「かしま」に宿していひますが、このうち注目されるのは「一のす」です。「一のす」とは「一洲」のことで、神崎川の河口にあつた砂州の一つであり、現在の尼崎市域南東部にあたると考えられるのです。

ここで俊頼は「一のすにことなく入りてよろこぶ」と記していひます。「ことなく」といひのですから、これは大阪湾から一洲に入るには、何かトラブルの発生が予想されたのではないでしようか。

都を出発し、桂川の港である草津から船に乗つて、この日の申の刻（午後四時頃）、現在の杭瀬付近と考えられる寺江に到着しました。ここに描かれた現在の尼崎市内の風景でとくに注目すべきは、一行が寺江で宿をとつた寺江山荘のありさまです。

寺江山荘は、院の乳母であつた藤原邦子の父親で、当時「大福長者」と呼ばれて富貴を誇つた権大納言藤原邦綱の別荘でした。この山荘は、同じ治承四年の一月、福原から京都に戻る安徳天皇がここで一泊していひるように、この時期の記録にはよく登場するのですが、『御幸記』にはその様子がくわしく記されていひのです。これによれば、寺江山荘内の障子は唐絵や大和絵で彩られ、既にはめずらしい鞍を懸けた葦毛の馬がつながれていたほか、部屋の中には無数の調度品があつたとされており、寺江山荘は京都から離れた土地にありながら、まるで京都の御所のような豪華な邸宅だつたようです。また、このような調度は「上達部・殿上人の居所」にもあつたとされていひますが、院の居所のほか、随行する貴族たちの居所まで設けられていたといひことは、邸が広大なものだつたことをうかがわせます。

そして、さらに興味深いのは、一行が神崎川から船に乗つたままで邸内に入り、池に面した釣殿に船を着けていたように、池を通して神崎川と邸内がつながつた造りになつていたといひことです。

同じ年の六月一四日、京都から福原に赴いた右大臣兼実は、寺江山荘で休憩した後、そこから船に乗つて大物に行き、そこで輿に乗り換えていひます（『玉葉』同日条）。^⑧これをあわせて考えると、寺江は周りを河でかこまれた中州のような場所だつたことになるのでは



神崎川の原風景 『小田村勢』（小田村、1936）より

実はのち建久七年（一九六六）六月三日の太政官符（内閣文庫所蔵摂津国古文書）で、一の洲は「洪濤漫漫にして万里岸無し、広渕浩浩にして四面風を受く」とされておひ、事故が多発する航海の難所だつたようです。俊頼の記録は、こうした難所という認識が広く共有されていたことを示すものとして興味深いものといひます。

また、ここでは一安心する俊頼一行のもとに、「とひ」といひ者がやつて来て酒を勧めていひます。酒を飲んだ人々は、「ことの外にすかりければ（思ひのほかすっぱかつたので）」飲むのを止めてしまつたといひのですが、このように多くの船が停泊するとともに、そこに酒を持つてきて差し入れる人たちがいたといひのも、難所

ないでしようか。当時の尼崎地域は神崎川河口に島状の砂州がいくつ形成されておひ、寺江もそのひとつであつたと考えられます。船で出入りするといひ寺江山荘の構造は、まさにこうしたこの地域の地形や交通の特質を表すものといひるのです。

鎌倉時代の尼崎の風景 ここまでみたふたつの紀行は、旅の途中に尼崎に立ち寄つたといひものでしたが、最初に述べたように、尼崎を旅の目的地とした紀行がひとつだけ残つていひます。

一三世紀末、伏見天皇に仕えた側近女房である中務内侍・藤原経子（高倉永経の娘）が記した『中務内侍日記』^⑨は、『蜻蛉日記』や『紫式部日記』など、宮仕えする女性が記した日記文学の流れに位置付けられる作品です。そのなかに、年ははつきり書かれていひないのですが、弘安八年（一二八五）と推定されていひる尼崎への紀行が記されていひるのです。

これまで尼崎に関する地域史研究では、ほとんど言及されていひませんが、経子の紀行は鎌倉時代における尼崎の風景を写したものととして大変重要です。たとえば、経子は神崎川の河口で「東北の方を見れば、住吉の松、群立絶えぐに霞みて見ゆ」と述べていひます。ここに見える「住吉」については、かつては大阪の住吉大社のことであり、尼崎の北東には住吉大社はないから「東北」といひるのは経子の間違ひと考えられてきました。しかし、近年では、市内梶ヶ島の住吉神社をはじめとして、現在、神崎川河口周辺にも住吉社が複数存在することから、ここに描かれた「住吉」も、このようなこの地域に存在した住吉社のことであつた可能性が指摘されていひます。^⑩これにしたがえば、鎌倉時代には神崎川の河口から北東の方角には、住吉社の松

である一方でにぎわつた一洲の港の日常風景を描いたものとして注目すべきでしよう。

高倉院の御幸と寺江山荘 一二世紀になると、熊野や高野山をはじめとする寺社参詣が流行し、受領だけでなく、上流貴族にも旅に出る者が多くなりまひます。そのなかでも空前の一大旅行だつたのが、治承四年（一一八〇）三月の高倉院敵島御幸です。何しろ、前月に天皇の位を退いて上皇になつたばかりの高倉院が公卿や女房、従者たちを大勢引き連れて、都から遠く離れた安芸の宮島までの旅行に出たのです。沿道に住む人々にとつても、御幸は都がそのまま移つてくるかのような騒動だつたに違ひありません。

『高倉院敵島御幸記』^⑥は、この御幸について、院の近臣で御幸にも随行した源通親がまとめた紀行です（以下、『御幸記』と略す）。近年の研究によれば、現在伝わる『御幸記』は、後世かなり手が加えられていひるようですが、地名などの記述は正確で、描かれた景色も信頼できるものであるようです。『御幸記』によれば、高倉院とその一行は三月一九日の明け方に京



寺江亭址の碑 杭瀬寺島2丁目



長洲貴布禰神社

並木が立ち並びという光景が見えたということになるでしょう。

また、紀行には「厩、貴布禰の浦といふ方に出でて見れば、浦の松風、波に通ひて、入海心すこく、神さびていと尊し。浜に海人どもの、貝拾ひ、また沖釣するもあり」との記述もあります。「貴布禰の浦」という地名はほかには見られませんが、「貴布禰」の名前は現在、市内長洲中通と西本町に所在する貴布禰神社と関わるものでしょう。このうち西本町の貴布禰神社は、長洲の貴布禰神社を分祀したものと伝えられます

ので、「貴布禰の浦」とはおそらく長洲近辺と考えられます。だとすれば、このことは、長洲の貴布禰神社が確実に鎌倉時代には存在していたことを示す史料としても注目されるのです。

それにしても、経子はなぜ尼崎への旅に出たのでしょうか。その目的は紀行には明記していませんが、彼女は九月四日から二〇日まで半月にもわたって尼崎に滞在し、「心許なく数へられる日数も程なくて（待ち遠しく数えずには居られなかった日数も過ぎて）」と述べているので、この間、尼崎にいなければならない何らかの理由があったようです。この理由に関する手がかりは、紀行の本文からは何も得られないのですが、経子の旅が弘安八年だとすると注目されるのは、同年一〇月、亀山院が大阪湾岸への大規模な巡幸を行っていたことです。

この巡幸については、翌年からはじまる、諸港での善通寺修造銭徴収との関係が指摘されています。つまり、港に入る船から修造銭を徴収するにあたり、院は実際に湾岸諸港の現状を確認しようとしたということです。残念ながら、経子の仕える伏見天皇は亀山院とは対立関係にあったので、経子の旅と亀山院の巡幸が直接結びつく可能性はゼロに近いのですが、亀山院が大阪湾岸に着目する矢先、対立する伏見天皇の側近女房が尼崎を訪れていたというのは興味深いところです。これまで、こうした紀行は、あくまで文学的な観点から論じられるのみだったので、歴史学の視点からはあまり注目されてきませんでした。しかし、以上のように歴史的な事実と組み合わせて分析すれば、こうした紀行からも、新たな事実を読み解ける可能性があるのです。

〔注〕

- 〔1〕松園斉「古代・中世の紀行（旅の日記）覚書」（『安城市史研究』第八号、二〇〇七・三）
- 〔2〕同前
- 〔3〕『新編国歌大観』第三巻・私家歌集編一（角川書店一九八五）に収録。関係部分は「尼崎市史古代・中世史料補遺（二）」（『地域史研究』第一一四号、二〇一四・一〇）の二二に掲載。
- 〔4〕俊頼の旅の行程は、小池一行「源俊頼の旅と和歌―悲歎部を中心として―」（宮内庁書陵部『書陵部紀要』第三号、一九七一・一一）を参照した。
- 〔5〕『尼崎市史』第四巻一般編年史料八五
- 〔6〕『新日本古典文学大系五一』『中世日記紀行集』一（岩波書店、一九九〇）に収録。関係部分は前掲「尼崎市史古代・中世史料補遺（二）」の三二二に掲載。
- 〔7〕小川剛生『高倉院殿島御幸記』をめぐって」（『明月記研究』第九号、続群書類従完成会、二〇〇四・二二）
- 〔8〕『尼崎市史』第四巻一般編年史料五八
- 〔9〕岩佐美代子『校訂中務内侍日記全注釈』（笠間書院、二〇〇六）。本項の日記原文及び解釈はすべて同書から引用した。なお、関係部分は「尼崎市史古代・中世史料補遺（二）」（『地域史研究』第一一五号、二〇一五・一〇）の九五に掲載。
- 〔10〕寺尾美子『中務内侍日記』注釈小考―丑寅のかたの住吉と神さびたる貴布祢のうら―」（駒澤大学『駒澤國文』第二八号、一九九一・二二）
- 〔11〕『尼崎志』第二篇（尼崎市編・発行、一九三二）
- 〔12〕藤田明良「鎌倉後期の大坂湾岸―治天の君と関所―」（『ヒストリア』第一六二号、一九九八・一一）

〔執筆者〕樋口 健太郎

例です。

やがて平安時代中期から後期には、ストーリーを記した詞書と、絵を描いた料紙とを、交互につなげて展開する標準的な絵巻の形式が完成します。仏教主題だけでなく、世俗的な物語も描かれるようになり、王朝文化の成熟とともに貴族社会で愛好されました。『源氏物語』（一一世紀はじめ）には絵巻を鑑賞する場面があり、紫式部は絵巻に対して鋭い批評を行なっています。残念ながら、一一世紀に制作された絵巻は現存していませんが、一二世紀の「源氏物語絵巻」（徳川美術館・五島美術館蔵）、「信貴山縁起絵巻」（朝護孫子寺蔵）、「伴大納言絵巻」（出光美術館蔵）は、平安絵巻の優れた完成度を示しています。「源氏物語絵巻」は登場人物たちの感情の機微を繊細に描きわけ、「信貴山縁起絵巻」は寺院の開創にまつわる仏や僧侶の奇跡を絵画化、「伴大納言絵巻」は貴族社会の政治闘争を描きだします。

鎌倉時代には、寺院や神社の開創をめぐる奇跡を描いた縁起絵巻、仏教各宗派の祖師たちを主人公とする高僧伝絵巻などが流行し、一セットで一〇巻以上にもなる大規模な作例が増えてきます。奈良の春日社をめぐる靈験を二〇巻に描いた「春日権現験記絵巻」（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）、時宗の祖である一遍の全国布教を二巻に展開した「一遍聖絵」（清浄光寺蔵）などが代表的な作例です。京都・奈良の有力な寺院・神社や、いわゆる鎌倉新仏教の教団は、絵巻の制作によって寺社の歴史と神仏の靈験を再確認し、祖師の教えに正しく連なることを表明したのです。

室町時代になると、新たに政権の座についた足利将軍家、応仁の乱後には下剋上によって権力を獲得した

第三節 〈実践編〉

2 絵画史料

「大覚寺縁起絵巻」を読み解く



大覚寺境内

はじめに

尼崎市寺町に所在する月峯山大覚寺には、「大覚寺縁起絵巻」（以下、大覚寺本と略称）が所蔵されています。この絵巻は、大覚寺の開創と発展にまつわるストーリーを、一巻全四段の詞書と絵で表現しており、中世から近世にかけての尼崎を視覚的に知るうえで欠かせない資料です。その成立は、画風や詞書の書風から、江戸時代初期（一七世紀）頃と考えられます。これまで、十分に研究が進んできませんでした。が、近年、さまざまな角度から光があてられ、修理も完成し、各地の博物館で展覧会に出品されるようになりました。ここでは、美術史学における絵巻研究を紹介しながら、大覚寺本がどのように制作されたのかを読み解きます。

絵巻の歴史

まず、江戸時代初期に「大覚寺縁起絵巻」が出現するまでの、およそ千年にわたる絵巻の歴史を簡単にふり返っておきましょう。

六世紀に仏教が中国・朝鮮半島を経由して日本に伝わり、漢字という文字や紙と筆という筆記用具も導入されます。仏教経典の多くは、紙を横長につないで、漢字を縦書きにし、右から左へと展開しますが、これに絵が入ったものが絵巻です。縦幅が三五センチほど、横の長さは一〇～二〇メートルぐらい。数巻のセットになったものが多く、現存最大のセットは「法然上人絵伝」（知恩院蔵）の四八巻で、すべての長さは一キロメートルにもなります。

奈良時代（八世紀）に制作された「過去現在因果経（絵因果経）」（上品蓮台寺ほか蔵）は、釈迦の伝記を描いた絵巻で、画面を上下にわけ、下段に経典にもとづく物語のテキストを、上段にはそれに対応する絵を展開します。これは日本における絵巻の源流といふべき作

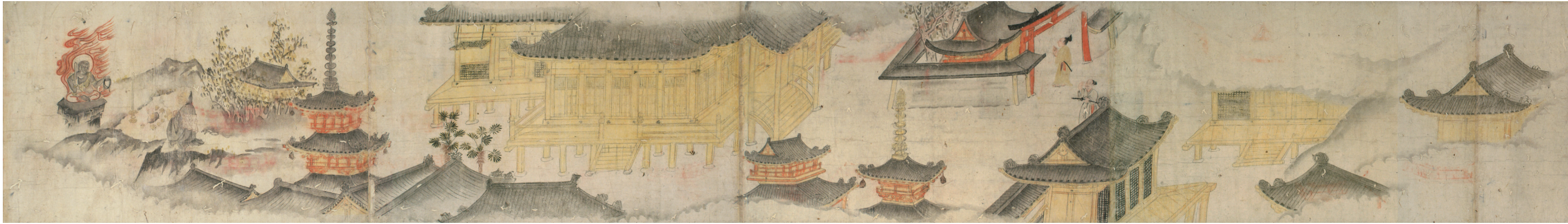


図1 「大覚寺縁起絵巻」第一段（尼崎市教育委員会提供写真、図2～5も同じ）



図2 「大覚寺縁起絵巻」第二段

大名たちが、絵巻の制作に参入します。このころ成立した土佐派や狩野派などの専門絵師集団が、絵を担当しました。室町時代の絵巻は、平安・鎌倉時代の作例を古典と仰ぎ、これらを巧みに再生させています。さらに、室町末期から江戸時代初期にかけては、庶民の信仰や出世をテーマとするお伽草子絵巻が流行し、稚拙味を帯びた画風のものも増えていきます。江戸時代になると、新たに権力を握った徳川將軍家や各地の大名が絵巻の制作に参入し、城下町の主要な寺社に奉納した例もあります。

このように、室町時代から江戸初

期にかけても絵巻の制作は連綿と続いており、作品は京都や奈良の周辺だけでなく畿内各地や遠く地方にも広がります。しかし、平安・鎌倉絵巻のオリジナル性の強さに比べて、室町・江戸絵巻はコピーとしての性格が強いため、これまで美術史学では十分に評価されず、研究も概して低調でした。最近では、こうした状況にも変化がおとずれています。美術史学における転写本への再評価、歴史学における地域研究の進展、国文学におけるお伽草子絵巻への注目にもなっており、あらためて中世末から近世にかけての絵巻が研究の俎上に載せられるようになりました。大覚寺本もその一例として重要です。

「大覚寺縁起絵巻」と「大覚寺縁起絵巻」

次に、「大覚寺縁起絵巻」の研究がどのように進んできたのか、ふり返ってみましょう。昭和三〇年（一九五五）、絵巻の詞書が翻刻され（兵庫史学会研究資料第四集『大覚寺文書』、兵庫史学会・大覚寺編・発行）、大覚寺の歴史を物語る歴史資料として注目されました。昭和四一年に刊行された『尼崎市史』第一巻には、絵の一部が掲載されましたが、美術作品としての価値について詳細な言及はありません。

昭和五五年に刊行された『新修日本絵巻物全集』別巻一（角川書店）には、「大覚寺縁起絵巻」と関係の深い作品が掲載されました。摂津国能勢郡（現大阪府豊能郡能勢町）にある月峯寺（槻峯寺）の開創を描いた「槻峯寺建立修行縁起絵巻」（フリーア美術館蔵、以下フリーア本と略称）です。二巻全一〇段からなる絵巻で、室町時代の明応四年（一四九五）に公家で学者の橋本公夏（一四五四～一五三八）が詞書を執筆したことが奥書に記されています。

中世の月峯寺は能勢北部の剣尾山山頂付近にあり、戦国期に兵火で焼失、江戸時代には剣尾山麓に移転しました。戦後、絵巻は米国に渡り、昭和三六年にワシントンDCに所在するフリーア美術館の所蔵となりました。絵を描いたのは、室町後期の画壇の最高峰にいた土佐光信。奥書に記録はありませんが、絵の様式が光信の基準作と合致します。

この絵巻を注文し、月峯寺に奉納したのは細川政元（一四六六～一五〇七）と推定されます。当時、幕府の管領を務め、摂津国の守護でもあった政元は、明応二年（一四九三）に將軍足利義材（義植）を廃して足利義澄を擁立するというクーデターを敢行、政権を掌握しました。フリーア本は、下剋上によって権力を手にした大名が、絵巻制作に参入したことを示す、重要な資料ということになります。

この絵巻の下巻は、大覚寺本の内容と重なります。後述のように、能勢町の月峯寺と尼崎市の大覚寺は密接な関係にありました。大覚寺本が美術史の文脈で注目されるようになった直接のきっかけは、フリーア本を転写した、現存唯一の作例である、という点にあったのです。室町から江戸時代の絵巻を考察する際には、絵や詞書の転写関係について注意を払う必要があります。

「槻峯寺建立修行縁起絵巻」上巻の内容 ここで、槻峯寺建立修行縁起絵巻」上巻の内容を略述しておきましょう。

（上巻第一段）
百済の僧・日羅は、聖徳太子（五七四～六二二）に異国調伏の適地に寺院を建立することを命ぜられ、各地を探索するが見つからず、諦めて百済に

戻ろうと摂津国長洲（現尼崎市）にやってきたとき、この地の浦人から山頂より光を放つ霊地が遙か北方に存在することを知らされる。

（上巻第二段）
日羅は長洲の浦人とともに光源の地を求めて深山にわけ入り数日を過ごすうち、五色の小川とそこに架かる金銀瑠璃で荘厳された石橋を発見、観音の霊地であることを知る。

（上巻第三段）
山奥に進むと、異香薫じ、瑞花降る地に辿りつく。

（上巻第四段）
さらに高山に登ると、日羅一行は光を放つ槻の大木を発見、この地に寺院を建立することを決意し、聖徳太子に報告、太子はここに御幸する。

（上巻第五段）
太子は日羅に槻木を伐り倒すことを命じ、日羅は七日間加持した斧を長洲の浦人に渡してこれを伐らせる。すると大地震動し、音楽が響き、花が降り、異香薫じ、光明が輝くなか、生身の千手観音が切り株の上に出現、太子と日羅は五体投地すること数刻に及んだ。一方、槻木を伐り倒した浦人は気絶したが、日羅の加持により蘇生した。

続く下巻は、「大覚寺縁起絵巻」と同内容です。大覚寺本の絵とともにくわしく見ていきましょう。

「大覚寺縁起絵巻」の調査と、その内容 平成一五年（二〇〇三）二月、「槻峯寺建立修行縁起絵巻」の研究を進めていた私は、大覚寺との協力で、「大覚寺縁起絵巻」及び関係資料の調査をすることができました。江戸時代の絵巻で、全巻がカラー図版で出版されているものはほとんどありません。まずは実物を熟覧



図3 「大覚寺縁起絵巻」第三段



図4 「大覚寺縁起絵巻」第四段

したうえで、写真の撮影を行ないながら、作品そのもののデータを記録していく必要があります。

「大覚寺縁起絵巻」は紙本着色、全一卷で詞書と絵が四段ずつあります。料紙は全部で二四枚を継いでおり、縦幅が二九・八センチ、横の全長が一、〇三八・三センチです。なお、二〇〇八年に完成した修理により、現状は、縦三〇・八センチ、横一、〇七五・二センチになっています。大きな破損はなく、絵の具や墨も十分に残っており、錯簡（修理の際に、料紙の順序を誤って継ぐこと）や欠失は確認でき

ません。多くの絵巻の巻末には奥書という書きつけがあり、制作年、詞書の筆者、絵師、制作資金を出した注文主、奉納の目的などが記されています。前述のように、フリーア本は奥書から制作年代と詞書の筆者がわかりました。大覚寺本は奥書がないため、制作事情は不明です。内容は次のとおりです。

（第一段）

伐り倒した槻木の跡に伽藍を整備、生身の千手観音を放光の槻木から新たに彫り出した等身像で覆い、体内に六体の尊像を納め本尊としたこと、本堂・薬師堂・九重塔ほかの伽藍の威容、八幡・稻荷・春日などの諸神の勧請について述べる。千手観音の体内に納めた霊宝のひとつは霊剣で、これは日羅が当山で異国調伏の不動秘法を修したときに壇上に出現したものであり、「剣尾山」の名称はこれによるといふ。

絵は、剣尾山の頂上近くに広がる月峯寺の境内。大きな本堂のほか、九重塔らしき大塔や、鎮守社がいずれも瓦葺で描かれる（図一）。フリーア本では男女の参詣者を数多く描くのに対し、本絵巻には二名の男性参詣者が描かれるのみ。

（第二段）

深山にある能勢の月峯寺への参拝は困難なため、燈明を掲げて遙拝する目的で長洲浦に建立された燈爐堂の由来を記す。燈爐堂は大覚寺の前身と考えられる寺院で、尼崎の大覚寺は、月峯寺の別院という位置付けになる。

絵は、前半が長洲の海岸に建立された燈爐堂と老若男女の参詣者、後半が海上に浮かぶ大小の船。基本的な構図はフリーア本と同様であるが、

大覚寺本では参詣者の数が増やされている（図二）。

第一段で月峯寺への参詣者が大幅に減少していたことも考えあわせると、本絵巻の主眼は燈爐堂の繁栄を強調する点にあったといえる。

（第三段）

「槻峯寺」の称が放光の槻の霊木によること、当山が日月の二浄土であることを説き、山中にある天魔が来遊する天狗石、悪魔を封じた唐櫃石の由来について述べる。唐櫃石にはしばしば不動明王が出現したという。

絵は、フリーア本を踏襲し、山中の不動明王や天狗を描く。本絵巻は山の表現が独特

で、切り立つような岩肌が水墨によって表現されている（図三）。こうした表現から、狩野派など漢画系の絵師の関与が想定される。

（第四段）

当山が幽邃の霊地であること述べ、「中古以来事」として、当寺の鐘はもともと天竺祇園精舎北門の鐘であつたが失われたこと、「本尊御戸開閉之事」として、三三年に一度しか開かれぬ本尊厨子の戸を康永二年（一三四三）三月一八日に「土御門殿」が権勢を背景に自ら開こうとして臭煙にまかれ悶絶、時を同じくして能勢郡枳瀬山（現能勢町）にあったその宿所が落雷によって焼失したことを述べる。

絵は、月峯寺の本堂で本尊を開扉する「土御門殿」、後半に炎上する宿所を描き、両者の中間に、火災を伝えようと月峯寺に駆けつける人々が描かれる。ここでも、水墨による切り立った岩山の表現が特徴的（図四）。

以上が、「大覚寺縁起絵巻」の内容です。なお大覚寺には、『月峯寺縁起』（図五）と題されるテキストのみの文書があり、フリーア本上下巻の詞書を転写しています。

「大覚寺縁起絵巻」の成立過程を考える 次に、「大覚寺縁起絵巻」がいつ、誰によって、どのような経緯で制作されたのかを考察します。

大覚寺本の場合、次の三つの視点からの分析が有効です。第一に、詞書のテキストの比較。第二に、絵の様式の検討によるおおよその制作年代の推定。第三に、大覚寺の歴史から、絵巻を制作する契機となるようなできごとや時期を推考することです。

図5 「大覚寺縁起絵巻」（右）と『月峯寺縁起』（左）



まず、フリーア本・大覚寺本・『月峯寺縁起』の三つのテキストを、文字の異同に注目して比較すると、フリーア本が祖本で、この上下巻の詞書を筆写したものの（仮にX本と称す）が存在したと推定されます。そして、X本から下巻のテキストのみを抽出し絵を付したのが大覚寺本、一方、X本上下巻のテキストを転写したのが『月峯寺縁起』、という関係が成立します。『月峯寺縁起』は文字に誤写がありますが、大覚寺本の文字はほぼ正しく写されており、後者が前者を写した可能性はありません。

大覚寺本の絵を見ると、その制作時期は一六世紀後半から一七世紀後半あたりと推定されます。いまのところ同一筆者と断定できるような作例は見出せていませんが、絵巻のなかで山や岩の表現に水墨を積極的に導入したのは、狩野元信（一四七七～一五五九）であり、大覚寺本は狩野派の勢力が著しく拡大する一六世紀末以降、同派を学んだ絵師によるものと考えて大過ないでしょう。

さて、長洲の燈爐堂を大覚寺の前身とする説は、フリーア本・大覚寺本・『月峯寺縁起』のテキストのなかで直接触れられているわけではありません。しかし、元禄一四年（一七〇二）に成立した摂津国の地誌『摂陽群談』では、能勢郡の月峯寺の項に、日羅が二体の千手観音を造立し、ひとつを月峯寺、もうひとつを大覚寺に安置したと記されます。同書、河辺郡尼崎の大覚寺の項には、同寺の「月峯山」という山号が月峯寺の名によると記されており、両寺院の密接な関係が判明します。日羅による開基という伝承は、フリーア本や大覚寺本にもつくものと思われるので、一八世紀初頭までには大覚寺本は成立し、大覚寺に所蔵

されていたと推定されます。

様式の上限と、史料からの下限を考えると、大覚寺本は一七世紀のいずれかの時期に成立したと推定されます。この頃の大覚寺をめぐる大きな動きとして、伽藍の移転があげられます。元和三年（一六一七）に大名の戸田氏鉄が尼崎に入部し、尼崎城の築城を開始します。現在の寺町はこのときに形成され、大覚寺もここに移りました。元和年間（一六一五～二四）に開始された尼崎の城下町建設とともに、大覚寺の伽藍も新たに整備されたことになります。こうした一連の流れのなかで、大覚寺の縁起を再確認する絵巻が制作されたと思われます。

おわりに 絵巻の歴史をふり返ったとき、フリーア本は、室町後期に戦国大名が絵巻制作に参入した画期を示す作例として重要です。そして、これを転写した大覚寺本は、近世初頭における幕藩体制の形成期に、城下町整備による寺院の移転と、それにもなう寺史の再編事業を示す作例として位置付けることができそうです。

平成一七年には、大覚寺の開創一、四〇〇年を記念して摂津尼崎大覚寺史料一『槻峯寺建立修行縁起絵巻・大覚寺縁起絵巻』（月峯山大覚寺）が刊行されました。ここには、「槻峯寺建立修行縁起絵巻」と、「大覚寺縁起絵巻」の全場面のカラー写真、及び両絵巻の詞書と『月峯寺縁起』の翻刻が掲載され、研究の基礎資料を提供しています。同書に掲載された前田徹氏の論文「中世港湾都市尼崎と槻峯寺・大覚寺縁起絵巻」は、文安二年（一四四五）における兵庫港（神戸港の前身）の関税台帳「兵庫北関入船納帳」を分析し、当時の尼崎に籍を置く船は中・小型船が主体であったと述べていま

す。同時期のフリーア本下巻第二段には、船底を丸木とした中型の準構造船が描かれており、室町時代における尼崎港の船舶の大きさを反映しているようです。一方、大覚寺本の同じ段には、船体すべてを板材で構成した大型の構造船が描かれています。近世初期には尼崎に寄港する船が大型化し、そのイメージを大覚寺本が反映している可能性があります。

大覚寺本は、調査研究の進展にもなっており、展覧会に出品される機会も増えています。兵庫県立歴史博物館ほかで開催された「津々浦々をめぐる―中世瀬戸内の流通と交流―展（平成一六年）や、神戸市立博物館の「海の回廊―古代・中世の交流と美―展（平成二三年）では、中世末から近世にかけて、瀬戸内の海上交通の要港として尼崎が繁栄したことを視覚的に示す重要な資料として展示されています。また、平成二〇年には修理が完成し、尼信会館にてお披露目が行なわれました。「大覚寺縁起絵巻」は、今後もさらなる分析が求められる、重要な作例です。

〔参考文献〕

高岸輝「大覚寺縁起絵巻」と「槻峯寺建立修行縁起絵巻」（『地域史研究』第三三巻第一号、二〇〇三・九）
同「槻峯寺建立修行縁起絵巻」から「大覚寺縁起絵巻」へ―絵巻の中世と近世―（摂津尼崎大覚寺史料一『槻峯寺建立修行縁起絵巻・大覚寺縁起絵巻』月峯山大覚寺、二〇〇五）

〔執筆者〕高岸輝

第三節 〈実践編〉

3 調査・研究から活用へ

とまつじょう

富松城の研究

―戦国期城郭の研究と

まちづくりへの活用―



平成一四年に富松神社参集殿で開催された「見直そう尼崎の宝・中世の富松城展」（富松城跡を活かすまちづくり委員会提供写真）

はじめに 現在、尼崎市富松町には、戦国時代の城郭である富松城の土塁と堀の一部が残されています。地元では「富松城跡を活かすまちづくり委員会」が保存に取り組み、まちづくりへの活用をはかっています。そこでは富松城の歴史を知ろうという機運が高まり、専門家を呼んで講演会を開催したり、富松城が登場する文献史料の勉強会などが行なわれました。この富松城の事例から、戦国期の城について調べ学ぶこと、また史跡を活かし、まちづくり活動につなげていくことの意義などについて考えてみたいと思います。

文献史料からみる富松城 最初に、文献史料（文字の書かれた史料）から富松城について調べたり、分析したりする方法について見てみましょう。

まず、富松城に関する文献史料として、どんなものがあるかを調べるために、『尼崎市史』第四巻（以下、市史第四巻）を見てみます。第四巻は史料編として古代・中世の尼崎に関する史料が収録されていますので、このなかから、富松城について記載のある史料を探していきます。この際に注意が必要なのは、文献史料には、その事実が発生した当時に作成されたもの（いわゆる一次史料）と、後になって書かれたもの（いわゆる二次史料）が存在するということです。

たとえば、長享二年（一四八八）に作成された「如意庵領年貢算用状」（市史第四巻一般編年史料三九三、大徳寺文書）という史料があります。これは、大徳寺の塔頭如意庵の末寺である上鳴尾（現西宮市）の長蘆寺領において徴収された年貢のうちから、どういった用途にどれだけ支出し、その結果、残額がいくら残っているかを計上したものです。そのなかに、「富松城縄竹代」が支出されていることが記載されています。こ

れは「富松城縄竹代」が支出された当時に、それを記録し計算するために作成された史料であり、いわゆる一次史料といえるものです。この「富松城縄竹代」を徴収しているのは摂津国守護細川氏であると考えられ、当時の富松城が守護の管理下にあり、またその維持のための費用を周辺地域に負担させていることがわかります。富松城が、この地域にとって重要な城郭であったことを示すものといえます。

さらに市史第四巻を見ていくと、富松城に関するものとしては、このほかに「細川両家記」という史料があります（一般編年史料四三四など）。この「細川両家記」は軍記物と呼ばれるもので、たとえば享禄三年（一五三〇）の合戦で、細川常桓（高国）方が富松城に陣取ったということが書かれています。これは後の天文一九年（一五五〇）に、生嶋宗竹という人物が二〇年前のことを振りかえって書いたものであり、いわゆる二次史料ということになります。

一次史料と二次史料 一次史料と二次史料の違いは何でしょうか。一般論としては、信憑性の違いと考えられています。「如意庵領年貢算用状」は、年貢からの支出を計上するという用途のために同時代に作成されたものですから、「富松城縄竹代」が支出されたという事実はほぼ間違いないことだといってよいでしょう。これに対して、「細川両家記」のような後に書かれた史料の場合、作者の誤解や記憶違い、場合によっては創作や虚偽の記述などの可能性もあり、一般的には一次史料に比べ信憑性が劣ると考えられています。

もちろん一次史料でも、たとえば不正な支出をごまかすため虚偽の記載をしていたり、思い違いや書き間違いをしている可能性がないとはいえません。一方、

二次史料でも「細川両家記」は、事件が起きた時代からそう遠くない時期に、事件当時に生きていた人物が自身が見聞きしたことをふり返って書いているため、記載された事実は概ね信頼できると評価されています。

ですから必ずしも、一次史料は信用できるが二次史料は信用できないので使えない、というわけではありません。どちらもその記述内容が事実かどうか、他の史料などから吟味してみると（史料批判）が必要なのは同じです。ただ、二次史料は、より慎重な史料批判が必要になります。書かれていることを鵜呑みにするのは、危険だということです。

二次史料の特徴と使い方
二次史料には、一次史料

には出てこないような地名や人名が豊富に記載されている場合が多くあります。実は富松城も、一次史料に出てくるのは先にあげた「如意庵領年貢算用状」だけで、それ以外は「細川両家記」のような後世に成立した軍記物にしか出てきません（富松城に限定せず富松荘や富松郷などにも広げれば、ほかにも一次史料はありません）。したがって、一次史料だけでは富松城の歴史を十分に知ることはできず、二次史料も利用することが必要になってきます。実際、富松城に関係する合戦の経緯などについては『尼崎市史』第一巻や『図説尼崎の歴史』などにくわしく書かれていますが、それらは「細川両家記」の記述に多くを依拠しています。

そこで、ここでは二次史料を利用する際に、留意すべき点について書いておきたいと思います。

まず、記載に誤りや虚偽などがないかどうかを、他の史料と比較して検証してみることが必要になります。富松城そのものについては、前述のように、他の一次史料にはほとんど見えないので検証してみること

はできませんが、「細川両家記」に書かれている他の記述などは、当時の日記などの記録史料と比較して、概ね矛盾がないことなどから、基本的には富松城をめぐる記述も事実だろうと推定されています。

ここで注意しなければならないのは、他の史料と比較するといっても、複数の二次史料に同じことが書いてあるからといって、必ずしもその信憑性が高まるわけではないということです。たとえば、「細川両家記」と同じことが「足利季世記」という別の軍記物にも書かれていたとしても、それは「足利季世記」が、先に成立した「細川両家記」を参照して書かれたためという可能性が考えられるからです。

なお、軍記物の記述を同時代の一次史料と比較検証する際、よく使われるのは、当時の公家や僧侶などの日記です。その時代にどんな記録史料があるかを調べる際には、『国史大辞典』（吉川弘文館）の「記録」の項目に掲載されている「記録年表」が便利です。

作者のバイアスに注意する
二次史料を読むうえで、もうひとつ重要なのは、たとえ書かれている事実そのものについては虚偽や誤りがなかったとしても、記述には作者のバイアスがかかっているということです。これは、一次史料も含め、どんな史料にも多かれ少なかれあてはまることです。

「細川両家記」の作者である生嶋宗竹という人物は、その姓から、摂津国生島荘付近の出身であると推定されます。生島荘の荘域は、現在の尼崎市域の富松から難波の間のあたりと想定されています。また、永禄一年（一五六八）に、生嶋秀実という人物が「聚光院殿御茶湯料」として田地を河内国の真観寺に寄進しており、この聚光院殿とは永禄七年に死没し

た三好長慶のことであるため、生嶋秀実は三好氏と関係が深かったと考えられています。したがって、生嶋宗竹は、尼崎や富松の周辺に土地勘があり、三好氏に近い人物と考えられます。

そのうえで、「細川両家記」の記述を見てみると、「細川」という題名にもかかわらず、作者の主たる関心は三好氏の動向に向けられています。また、尼崎近辺の合戦については、地名などの記述が詳細です。富松城の記述が出てくるのも、このためでしょう。逆にいえば、細川氏や三好氏の動向を中心に描いているため、この時期の畿内政治史に、これらと同等に重要な役割を果たした畠山氏や六角氏などの勢力、あるいは摂津国以外の地域での合戦などについては記載が乏しく、生嶋宗竹という人物の出身地や立場からくる、ある種の偏りがある記述であることがわかります。

「細川両家記」は戦国期畿内政治史研究において、これまでも重要な史料として扱われてきましたが、近年、これまでの研究は細川氏・三好氏中心の「細川両家記」の叙述に影響され、河内守護家の畠山氏などが果たした役割が相対的に軽視されてきたという批判も提起されています。

このように、少し踏み込んで軍記物の内容を分析しようとするれば、作者の出自や立場など、全体の文脈に注意しながら読むことが重要になってきます。ちなみに、もし全体を読んでみたいという場合は、「細川両家記」は『群書類従』第二〇輯（続群書類従完成会）に収載されています。市史第四巻にもその出典が指示されていますが、もし市史第四巻に掲載されていない軍記物で、それがどの史料集に収録されているか知りたい場合は、『国書総目録』（岩波書店）や『戦国軍記事典』

（和泉書院）などで調べることができます。

写本の系統と異同
二次史料を読む際に留意すべき点の三つ目は、こうした軍記物などは原本が残されていることはまれで、たいていは写本が現存しているということです。写本では筆写の過程で写し間違いがあったり、写した人が追記したり考証して書き換えたりということが起こってきます。この結果、写本がいくつかの系統にわかれている場合もあります。

「細川両家記」にも多数の写本があり、いくつかの系統にわけられると考えられます。一般的によく利用されているのは、活字化され入手が容易な前述の『群書類従』に掲載されたものですが、それ以外にも、国立国会図書館所蔵「細川両家聞見事記」、内閣文庫所蔵「正禄間記」、宮内庁書陵部所蔵「三好記」、慶応大学所蔵「二川分流記」などがあります。表題は異なりますが、いずれも内容はほぼ同じです（表題は、作者がつけたものではなく、後につけられる場合が多いので、いろいろな表題が存在することになります）。

和田英道氏によれば、江戸初期に筆写された宮内庁書陵部所蔵「三好記」が現存する写本のなかでは最古のものであるということですが、これが「細川」ではなく「三好記」となっていることは、先の生嶋宗竹の立場ということと関連して興味深い点です（もっとも、必ずしも古い写本の方がより原本に近いとは限らないのですが）。「細川両家記」の諸写本は、内容については比較的相違が少なく、大筋をつかむだけであれば『群書類従』のもので十分ですが、細かい点では違いがあり、『群書類従』の底本が誤っていると考えられる個所もあります。

天文一八年の戦いに関する記述

たとえば、「細川

両家記」は前半部分が天文一九年、後半部分が元亀四年（一五七三）に書かれていますが、その前半部分の最後のところ、天文一八年の三好長慶と細川晴元・三好宗三（政長）との戦いの場面（市史第四巻一般編年史料四四七）を見てみましょう。

天文一八年五月、宗三衆や伊丹衆は「東富松城」などを攻撃しています。六月にはいわゆる江口の合戦が

あり、三好長慶は細川晴元・三好宗三方に対する勝利を決定付けます。しかしその後も伊丹城は長慶に対して抵抗を続け、「伊丹城計堅固也、同八月廿四日より対城こしらへ、東方は森本に池田衆、南は恒富、前田城に淡路国衆、西は御影塚に三好方衆、乾は小屋城に小川式部丞籠られたり」とあります。ここには、三好長慶方が伊丹城を攻めるため、その周囲に「対城」を築いたことが記されています（さらに年明け一月には、長慶が伊丹城攻めのため富松城に入ります）。

伊丹城を攻めるための「対城」を築くの、現在の伊丹市域にある森本や小屋（昆陽）はわかりますが、御影（現神戸市）はやや遠すぎるように思われます。これはやはり現在、伊丹市域にある「御願塚」の誤りでしょう。市史第四巻の編集者はそれに気づいて、「御影塚」の「影」の横に「願」と傍注を付けて史料の誤りを訂正していますが、これはたとえば先ほどの「三好記」など「細川両家記」の別の写本を見てみると、もともと「御願塚」となっています。

ところで、この伊丹城攻めの結末はどうなったのでしょうか。「細川両家記」によれば、天文一九年三月に三好長慶と伊丹氏が尼崎本興寺で会合して和睦し、伊丹や尼崎周辺の村々に大きな被害を与えた一連の戦乱はようやく終息しています。

摂津を中心に描く生島宗竹の視点
これが「細川両家記」前半部の最後の部分なのですが、生嶋宗竹は、三好長慶が細川晴元を破り、將軍足利義輝を京都から逐つて、政権を奪取する最大の画期となった江口の合戦で記述を終えず、この三好長慶と伊丹氏の和睦まで書いて記述を終えているということになります。これについて樋口大祐氏は、記述の中心軸が京都ではなく、摂津国下郡（戦国期に登場してくる新しい地域呼称で、豊島郡・川辺郡南部・武庫郡・菟原郡にあたる）に移っていることを示していると指摘しています。樋口氏は、こうした視点の移動を、一六世紀の新しい歴史叙述のスタイルとして評価しています。

確かに同時代に書かれた日記史料と比べてみても、京都の相国寺鹿苑院主の執務日記『鹿苑日録』が、このときの京都にいる將軍足利義輝や、將軍警固のため出陣した近江の六角氏の動向など京都周辺の情勢を記録しているのに対し、「細川両家記」には將軍や六角氏の動向はほとんど記述されていません。逆に『鹿苑日録』は江口の合戦こそ記録していますが、摂津国の情勢にはほとんど無関心です。作者の立場による二次史料の記述の偏りは、必ずしもマイナスの要素であるというだけではなく、むしろそうした生嶋宗竹の視点があることによって、京都で書かれた史料には現れない地域の豊富な情報が書き残されたのです。

文献史料以外からのアプローチ
次に、文献史料以外から富松城について分析する方法を見てみましょう。まずひとつには、発掘調査の成果を利用することがあげられます。富松城に関連する遺跡は、兵庫県道西宮豊中線をはさんで南側の富松城跡と、北側の東富松遺跡があります。両遺跡とも、尼崎市によって数次の

発掘調査が行なわれています。これらの調査成果は、尼崎市教育委員会が発行する各年度の『尼崎市埋蔵文化財調査年報』に掲載されており、数次にわたる調査成果から富松城に関する知見をわかりやすくまとめたものとしては、益田日吉氏の「考古学からみた富松城」^⑪があります。一連の調査によって、二重の堀や溝の跡、戦国時代の井戸などが発見されています。ただこうした発掘調査は、土木工事などによって遺構が破壊されるおそれがあるときに、その都度その部分についてのみ調査が行なわれるもので、まだ富松城の全体像が完全に把握されるには至っていません。

文献史料以外からアプローチするもうひとつの方法は、近世の絵図や近代の地籍図などを用いた歴史地理学的な分析手法です。一般的に戦国期以前の絵図が残されていることはまれで、戦国期に城郭が存在していた当時の様子そのものはなかなか知ることができません。しかし、城跡は、近世や近代に入っても地形に何らかの痕跡が残る場合が多くあり、また人々の記憶や地名という形でその痕跡が残されます。したがって、近世の絵図や地籍図、あるいは現在も残る微地形などから、戦国期の状況を推測してみることができます。

富松城については、仁木宏氏が、富松神社所蔵の寛政一二年（一八〇〇）作成の絵図と、明治期の地籍図を用いて考察を行なっています^⑫。たとえば絵図で富松城跡の部分を見ると、地形の盛り上がりった様子が描かれ、土塁跡の存在がわかります。また絵図では、富松城跡の南側を東西に走る道が城の西側の堀の手前で南に折れ曲がってから東に延び、その後ふたたび北に折れ曲がってから東の集落内へ続いているように描かれています。これは、もともと一直線だった道が、

富松城が築かれたのにもなって南へ移動されたものと考えられ、まっすぐ集落内へ入らせない、いわゆる「あてまげ」という防御のための構造になっています。一方、地籍図で富松城跡の土地を見ると、西側の堀の北端部が西に張り出して描かれています。この部分は土塁も張り出しており、城の北西角の防御性を高めるためのものであると考えられます。

また、昔の様子を知る人への聞き取り調査や、実際に現地に行って現在も残る微地形の観察を行なうことから、手がかりが得られる場合があります。仁木氏は聞き取り調査から、現在の富松神社を含む土地の周囲にも、かつて土塁が存在したと指摘しています。微地形は開発などによって失われてしまうことがありますが、場合によっては人々にその存在が記憶されていることもあります。しかし、とくに都市部では開発が進んで、かつての景観が変化し続ける一方、そうした明治や大正期の様子について記憶している、あるいは記憶を受け継いでいる人はほとんどいなくなっており、地域の記憶の継承が大きな課題となっています。

このように、近世の絵図や近代の地籍図、あるいはかつての景観についての人々の記憶は、中世の様子を復元するための貴重な手がかりになります。もちろん、これらが戦国期の状況をそのまま反映しているとは限りません。文献史料や考古学の発掘成果なども合わせて、多面的に分析していくことが必要になってきます。

富松城跡とまちづくり活動 富松では、「富松城跡を活かすまちづくり委員会」（以下、まちづくり委員会）が中心となって、富松城跡を保存する取り組みを進めています。単に城跡を保存するだけでなく、それをまちづくりに活かしていくことを目指しています。

まちづくり委員会は行政や大学などと連携して「見直そう尼崎の宝・中世の富松城展」（平成一四年一〇〇二月一二月二八日～二月一日、於富松神社参集殿、以下、富松城展）という住民手作りの展示会を開催し、その成果を踏まえてウェブ上に仮想の博物館「富松城歴史博物館」^⑬を作り（同一五年六月公開）、城跡前の市バス停留所名称を「富松城跡」に変更するよう市交通局に働きかけ実現したり（同一七年四月）と、ユニークな活動を次々と行なっています。

まちづくり委員会の代表を務め、富松神社の宮司でもある善見壽男氏によれば、こうした活動は、古くからこの地域に住む旧住民と、都市化が進むなかで移り住んできた新住民との関係が希薄であったことから、その交流のきっかけになればと意図して始めたものだということです^⑭。また、地域の歴史文化を次世代に継承していきたい^⑮ということで、子どもたちが参加する富松城の土塁の高さを測ってみる体験学習や、櫓を立てて往時の土塁の高さを体験する「一夜城」イベントなどが催されています。

まちづくり委員会の活動のひとつの特徴は、行政や大学に所属する専門家を活用していることです。こうした専門家を呼んで講演会やシンポジウムを開催するだけにとどまらず、「富松城展」では尼崎市教育委員会の協力を得て東富松遺跡から発掘された遺物の展示を実現しましたし、仮想「富松城歴史博物館」のサイト構築や『もっと知りたい中世の富松城と富松』刊行（平成一九年、以下、『中世の富松城と富松』の際にも、大学や行政の専門家にウェブサイト中の「展示」作成や刊行物の原稿執筆を依頼しています）。

双方向の取り組み ここで重要なのは、単に専門家

から一方的に知識の提供を受けるといった姿勢ではなく、一緒になって取り組んでいるという点です。たとえば「富松城歴史博物館」はウェブ上の仮想の博物館ですが、実際に建物があるかのように構想されています。まちづくり委員会では、その展示内容や展示室・収蔵庫などの配置といった設計をどうするかという段階から、専門家を交えて議論しています。ここでは住民の側からこういう博物館にしたいという思いを述べ、それについて専門家から意見を聞き、相互に議論しながらまとめていくという作業が行なわれました。

この過程で、住民にとっては、博物館というものについて専門的意見を踏まえて考える機会になり、専門家にとっても住民が博物館に何を求めているかを学ぶ機会となりました。また、最終的にできあがった博物館の「展示」も、専門家が作成したものではなく、「遊び・川、昔と今」など住民の作成した、住民でしか作

れないものもあります。『中世の富松城と富松』でも、専門家と並んで住民も執筆者になっています。

ここには、専門家から一方的に「答え」を教えるもらって、それを鵜呑みにするという受け身の姿勢ではなく、主体的な学びの姿勢があります。このことの持つ意味を、さらに別の角度から考えてみましょう。

原風景マップに寄せられた「声」 「富松城展」では、イラストレーターの井上眞理子氏の手になる「富松城と富松の原風景マップ」というイラストマップの展示が行なわれました。これは、富松城や富松地域の昔のことなどについての情報を盛り込んだものですが、単にこれを展示しただけでなく会場に小さな紙を用意して、来場者に地図に見える場所の思い出などを書いて地図上に貼ってもらう（「声」と呼ばれている）、という企画でした。その結果、五日間の展示期間中に、多数の「声」が寄せられました。そのなかには、たとえば



「富松城歴史博物館」トップページイメージ



富松城跡を活かすまちづくり委員会による七夕まつりの催し、つねに子どもたちが主役（同委員会提供写真）



まちづくり委員会のユニークな取り組み
イベント用の模造甲冑を身近な材料を使って製作（同上）

富松城跡について寄せられたものとして「子供の頃昭和三〇年頃」富松城の西側にあった小川に、よく魚取りに行ったのを思い出します。どじょう、ふな、ホタルもいて、今ではなつかしい思い出となりました^⑯というようなものがありました。

このことは、地域の人々にとって、富松城跡が戦国期西摂地域の重要な城郭だったという歴史研究上の価値だけでなく、子どもの頃の遊び場だったという意味も持つ場所であることを示しています。富松城跡という場の持つ意味（価値）は単一ではなく、多層的で多様なであり、富松城が地域にとって価値があるというとき、それはさまざまな文脈から意味付けられることができるのです。さらにいえば、富松という地域の歴史も、多様な関心からとらえることができます。

多様な関心・文脈と、主体的な学びの姿勢 地域に対しては、そこに暮らしている住民それぞれに、それ

その立場から多様な関心があるでしょう。たとえば、城跡の歴史に関心を持つ人もいれば、地域の子どもの遊び場として、ホテルがいたかつての自然環境の再生といったことに関心を持つ人もいます。あるいは地域の外部の人、たとえば、いまはよそに住んでいるが、かつて子ども時代をそこで過ごした人や、大学に所属する研究者なども、さまざまな関心を持っていることでしょう。そして、各々がそれぞれの関心・文脈に沿って、地域についての知識を有しています。

そのように考えたとき、地域をひとつの関心や文脈だけから眺め、あるいはその視点から描いた像で塗りつぶしてしまうのではなく、こうした多様な関心・文脈に開かれているということはとても大切なことです。

その意味では、富松地域のまちづくり活動が、こうしたまちづくり委員会の城跡を保存する取り組みを核にしながらも、それだけに収斂することなく、たとえば地元の特産品である一寸豆^{いっすんまめ}を活用した「一寸豆祭」^⑰の開催など、まちづくり委員会以外にもさまざまなグループが多様な取り組みを展開している点も注目されます。富松地域のまちづくり活動が多くくの住民の参加を得て広がりを持っていることは、こうした幅広い文脈や関心に開かれていることの表れでしょう。

専門家は専門家としての文脈で、たとえば中世城郭史への関心から、あるいは戦国期政治史への関心からというように、専門知識を有しています。他方、その地域に暮らす住民の関心の文脈は、これとはまた異なるものでしょう。しかも、それも単一ではなく、多様な関心が存在しているはずで、こうした多様な文脈を、どれかひとつに統一したり、他を排除したりしてしまうのではなく、あるいはそれぞれが孤立してバラ

バラに併存しているだけでもなく、それぞれの文脈を照らし合わせて、学び合うことが重要だといえます。先にふれた主体的な学びの姿勢というのは、ただ専門家が持っている文脈に沿って知識を受け取るだけではなく、あくまで住民自身の文脈のなかで、それを活かそうとする姿勢だといえるでしょう。

城跡の保存をひとつの契機としながら、多様な地域への関心を育んでいき、まちづくりの輪を広げていく富松の取り組みは、主体的な学びの姿勢ということとともに、歴史文化を活かしたまちづくりにひとつのモデルを提供しているのではないのでしょうか。

〔注〕

- (1) 森田恭二『戦国期歴代細川氏の研究』（和泉書院、一九九四）など
- (2) 『改訂史籍集覧』第三冊収載
- (3) 田中勇「中世の生島庄村落」（『地域史研究』第三巻第三号、一九七四・二）
- (4) 『八尾市史』史料編（八尾市、一九六〇）「真観寺文書・その他」二
- (5) 天野忠幸「三好氏研究と『細川両家記』」（大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター『都市文化研究』第二二二号、二〇一〇・三）
- (6) 小谷利明「畠山氏研究からみた戦国期畿内政治史像の再検討」（前掲『都市文化研究』第二二二号）
- (7) 藤本誉博「細川両家記」の諸写本の比較（前掲『都市文化研究』第二二二号）
- (8) 和田英道「細川氏関係軍記考（一）書誌篇―永正期を中心とする―」（『跡見学園女子大学国文学科報』第一二二号、一九八三・三）
- (9) 「細川両家記」の別の個所には「西富松城」も出て

くるが（市史第四巻一般編年史料四四三）、近世の富松が西富松村と東富松村にわかれており、現在、土塁と堀が残っているいわゆる富松城は旧東富松村内にあるので、「東富松城」にあたると思われる。

- (10) 樋口大祐「一六世紀の歴史叙述と畿内港町―『細川両家記』を中心に―」（『文学』第一三巻第五号、岩波書店、二〇二二・九）
- (11) 『もっと知りたい中世の富松城と富松』（富松城跡を活かすまちづくり委員会、二〇〇七）収録
- (12) 仁木宏「戦国富松都市論―尼崎市富松城・富松集落の研究―」（『地域史研究』第三巻第一号、二〇〇三・九）、前掲『もっと知りたい中世の富松城と富松』に同論文要約「戦国期富松城と富松集落の空間構造」（仁木宏監修、村井良介執筆）収録
- (13) <http://www.tomatsujyou.com/>
- (14) 善見壽男「富松城跡の保存運動と地域づくりの取り組み」（神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報「INX」【地域・大学・文化】第二号、二〇一〇・八）
- (15) 善見壽男「尼崎市富松のまちづくり」（神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『地域歴史遺産』の可能性、岩田書院、二〇一三）
- (16) イラストマップに寄せられた「声」は、ウェブ上の「富松城歴史博物館」で見ることができる。
- (17) 渡邊千央実・中桐祥子・山崎寿一「尼崎市・富松神社を核とした地域づくりの展開に関する一考察―富松一寸豆祭を中心として―」（『農村計画学会誌』第三一卷論文特集号、二〇二二・一一）

（執筆者） 村井 良介